
アーマードコア アウトサイダー

横山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーマードコア アウトサイダー

【Nコード】

N7543N

【作者名】

横山

【あらすじ】

人型機動兵器アーマードコアと搭乗者であり傭兵レイヴン。次世代機ネクスト、巨大兵器アームズフォートの登場によって忘れられようとしていた。だがレイヴン、オブライエンの元に、旧友であり同じレイヴンであるボーイングから依頼が入る。リッチランド農業プラント、その防衛作戦であった。

(前書き)

A C f Aの二次創作ですが、ネクストは登場しません。レイヴンが主役になっています。

巨人は砂漠に立っていた。それが十メートルほどの全長を誇る強力な兵器であり、両腕と背部に搭乗者によって選択された武装を有しているにも関わらず、シートを被せられ沈黙した状態ならば砂漠デューの迷彩シ・カモの施された鉄くずでしかない。アーマードコアと呼ばれるその兵器は、かつて最強の名を欲しいままにした人型機動兵器である。だが今となっては、もう昔話に過ぎなかった。この兵器は新たに登場した次世代型アーマードコア、通称ネクストにその座を奪われてしまっている。強者は更なる強者によって淘汰されるといふ、まさしく戦場につき物の理論だ。

出番の無いこの機体は、実に興味深い場所にあった。真横にオアシスがあり、隣接する形で粗雑な小屋が一軒、建てられている。その小屋からシートの下まで伸びる数本のケーブルは、機体のジェネレーター部に直結していた。耳をすませると微かに駆動音が聞こえる。巨人を動かす電力を流用しているのだろう。兵器が、まるで発電機のようなようだ。

そうする男は小屋の中にいた。カーキ色に染まった砂漠用の服装で、埃っぽく古びている。男は同じく所々が擦り切れ年季の入ったサバイバルジャケットを重ねていた。腰に窺えるホルスターからは、艶消し加工の黒い銃身が除く。九ミリ口径の軍用オートマティックだ。もっとも、どうみても軍属ではないこの男からすれば自衛用だろうが。大柄な体躯をしていて、脂肪を全て筋肉に変えたような印象だ。それらがほとんどの無駄もなく引き締まっていることから、ボディビルダーでなく実戦向きの傭兵だとわかる。クルーカットのブロンドで、鷲鼻に目は鋭く青かった。粗末な椅子に腰掛けており、テーブルに置かれた灰皿は吸い殻で溢れ、手にも火のついた煙草がある。

男の名はオブライエンと言った。他人がこの名を聞くと、数年前

に伝説的な活躍をしたネクスト乗り、いわゆるリンクスの一人ではないかと勘違いをする。その度に彼は苛立ち、訂正した。自分はリンクスでなく、レイヴンだと。相手によっては、レイヴンという単語に首を傾げる者もいた。ネクスト以前のアーマードコア、今ではノーマルと呼ばれる巨人に乗った傭兵の総称は、もはや通じる相手さえも少なくなっているらしい。

と、どこかで電子音が鳴った。通信機の呼び出し音に似ている。音源は小屋の隅にある台、そこに置かれたノート型の情報端末だ。オブライエンは煙草を最後の一服とでも言わんばかりに大きく吸い込み、端末の前に屈んでコンソールを操作する。省電力モードで暗転していたディスプレイに明かりが付き、音声出力をモニターする画面が開いた。

『オブライエンか？』

通信相手は言う。表示名はボーイング。すぐさま脇に転がるヘッドセットを接続し、オブライエンは答えた。

「何の用だ」

低い、だが不思議とよく通る声だった。彼と話す者であれば、その奇妙な響きにどこか脆さを感じただろう。

『ご挨拶じゃないか。友達がわざわざ通信を寄越したというのに』

「何が友達だ。おれとおまえは単なる同類だよ。未だに時代遅れの兵器にすがってる、年寄りもどきのレイヴンだ」

自嘲とも冗談ともつかない口調で言うと、ボーイングは楽しげな声を上げた。少なくとも、これがこの二人の間にある信頼関係ではあるらしい。

『同類か、悪い気はしないな』

「まったくだ。それで、何の用だ」

『仕事の依頼だ』

ボーイングが言い、画面が切り換わった。向こうでデータを送信したのだろう。地形を記すマップで、地名はリッチランド農業プラントとあった。

『雇い主はアルゼブラ社。目標はG A社が送り込む地上部隊の掃討だ』

「報酬はどうなっている」

『ブラウン・エールを一ヶ月は飲みまくれるくらいだ』

返答にオブライエンは苦笑した。

「イギリス系のおまえはそうだろうが、おれはロシア系だ。純粋にウオッカが恋しいね。怪しいな」

後半、語気にほんの少しだけ真剣味を出し、オブライエンは続けた。

「単なる地上部隊だけでそんな金をくれるのか。ネクストでも出てくるだろうよ、きっと」

『さすが鋭い。ご名答だ、オブライエン。ネクストは無いが、アームズフォートが見え隠れしている』

アームズフォート。ネクストを淘汰する巨大兵器の事だ。個体ごとに戦力差が開くネクストより、代替可能な人員と機器で構成された兵器である。安定的な戦果を稼げるという点では、現代戦の花形となりつつあった。

オブライエンは少し考え、それから答える。

「G Aの地上戦型アームズフォートと言つと、ランドクラブか」

『おそらく。不確かだが、それなら報酬額にも領けるだろう？』

「嫌になるな、まったく」

そう言つて煙草を啜える。火は点けなかった。

「なんでおれが？」

『ブローカーに僚機を出して良いかと尋ねたら、ありがたいことに許可をくれたからだ。おまえも、そろそろマトモな飯を食いたい頃じゃないかと思つてね』

「そいつはどうも。時間は？」

また画面が変わり、別のマップが現れた。

『アルゼブラ前哨基地だ。リッチランドから二〇マイルの南東にある。今日の二二〇〇時までここに集合しろとお達しだ』

「わかった。引き受けよう」

『遅れるなよ、相棒。向こうで会おう』

通信が終わる。ヘッドセットを外したオプライエンは、その足でロツカーまで行き中にあるパイロツトスーツとヘルメットを取り出す。灰色のACU迷彩で、耐衝撃素材と防弾素材を用いた代物だ。ライフル弾程度までならば防いでくれる。もっとも防ぐだけで、痣くらいはできるだろう。ヘルメットの方は首の骨が折れる。サバイバルベストを重ねてショルダーホルスターにハンドガンを収めてから、彼は小屋から出た。

嫌になる日中の光が、殺人的な熱量で降りかかる。彼は機体のシートを外して、脚立をかけてから電源供給のケーブルを引き抜く。起動を続けるジェネレーターの外部装甲をしつかりと閉じると、再び地面に戻って足場の位置を変える。背面に立てかけると、装甲に素早く登って開けっ放しだったコックピットへ潜り込んだ。装甲を閉じ、コンソールから伸びるケーブルをヘルメットに接続。メインシステムを起動する。

『メインシステム、オンライン。オートモニターを起動、パロメーター、オールグリーン』

頭部ユニットに搭載されたAI（人工知能）が、複雑に合成された声で喋る。中量二脚の機体が小刻みに振動し、タービンの喧しい音がヘルメットと装甲越しに伝わった。そして巨人は息を吹き返す。単眼のカメラアイは青く輝き、コックピットのリアルタイム・モニターが作動。ヘルメットバイザーにHUDが投影された。起動完了を知らせる文字に、合わせて機体の持つパーソナルネームが出力される。

ファルクラム、オンライン

その機体名だけ、今は存在しない亡国ロシアの文字だった。続けて武装のセイフティをAIが確認した。ファルクラムの兵装は、右腕部にAP弾八〇〇発のマシガン。左腕部に、対AC用ライフル砲。これは中距離射程で、弾は精度の高いAPFSDS弾。左背部

には追加弾倉パックと、右に多目的滑腔砲。滑腔砲の弾は三種類に分けられていて、通常のHE弾、対人および軽装甲目標用のM A A W S弾と、重装甲目標を破壊するH E A T M P弾だった。両肩にはスモークディスプレイャーもあり、これは万が一の撤退用だ。オプライエンはファルクラムを巡航モードに設定する。これでエネルギー供給がブースターのみに行なわれ、短時間での長距離移動が可能になるわけだ。

昼食は抜きになる。オプライエンは胸中で呟いた。そしてブースターを吹かす。久方ぶりに起動するファルクラムは、轟然と唸りを上げて外界へ向かった。

約六時間におよぶ巡航移動の末、ファルクラムのレーダーに一つの反応が浮かんだ。オプライエンは座標を確かめ、それがボーイングの言った前哨基地だと理解した。時刻は午後八時と四十分。集合時間には充分、間に合っている。

と、無線が受信を知らせる電子音を発した。迷い無く回線を開く。『所属不明機へ、こちらはアルゼブラ第61前哨基地所属、第556狙撃機甲中隊。貴機は我々の哨戒エリアを侵犯している。即刻、停止せよ。これは最終警告である』

それが言い終わるかどうかの時点で、ファルクラムが警告を発した。レーザー照準を受け、被ロックオン状態にあるとのことだ。それも複数。通信相手は狙撃機甲中隊といった。このエリアのどこかに、対機甲スナイパーライフルもしくはスナイパーキャノンを搭載する機体が隠れているのだろう。勧告どおりに機体を停止させ、オプライエンは言う。

「第556狙撃機甲中隊　中隊長でいいのか？」

『問題は無い』

と、相手の男もとい中隊長は言った。面白味の無い口調だとオプライエンは思う。中隊長が続けた。

『即刻、このエリアから立ち去るか、目的を知らせよ』

「556リーダー、こちらは登録レイヴン、オブライエン。およびパーソナルネーム、ファルクラムだ。そちらの防衛作戦を依頼された。同じく登録レイヴン、ボーイング。パーソナルネーム、ベヨネツトから聞いていないか？」

『了解、その話は聞いている。確認のため登録コードを』

「リマ5488エコー21フォックスロット」

途端、ロックオンが解除された。中隊長が言う。

『失礼した、レイヴン。改めて、第556狙撃機甲中隊、指揮官のハーケン大尉だ。こちらのコールサインはデルタ。少し待っていてくれ』

「了解、デルタシックス」

と返すと、通信が途切れる。変わってリーダー系に無数の表示が現れた。数は十二機。ファルクラムを四方から囲む形で、それは出現する。ステルス機能を備えているのだろう。内四機が接近してきた。四機編成で一個小隊、一個中隊は三個小隊とわかる。ナイトヴィジョンの視界で目視すると、すぐに機種が判別できた。量産型アイマードコアの一種。アルゼブラでなくBFF社の機体だ。鹵獲機か、もしくはライセンス機だろうとオブライエンは予想する。やはり背中には長距離射程のスナイパーキャノンがあり、機全体のフォルムも狙撃に特化されているようだ。

現在では、オブライエンのようなレイヴンが扱う高い互換性を持つ機体はオリジナルモデルと呼ばれ、非常に稀な存在だった。変わって現れたのが、互換性の変わりに各性能を最初から特化させた量産型である。

『レイヴン、こちらデルタ2 1、第二小隊長のアレックスだ。基地までエスコートする。ここは危険だ』

ハーケン中隊長に変わってその男は言った。声音から推測するに、二十代後半か三十あたりだろう。いずれにせよ、まだ若い。

「デルタ2 1、助かるよ。ここはいつもこんな歓迎なのか？」

先行するデルタ2小隊に追従しながら、やや皮肉を込めて言う。するとアレックスは本当にすまなそうな声で応じた。軍人の割に、あまり裏表の無い性格らしい。

『申し訳ない。皆、ピリピリしているんだ。敵が予定を早めれば、それだけ危険が増す』

「ここに来るデリバリーは苦労するだろうな」

アレックスが僅かに笑った。

『まあ、そうだな。今度、ピザの一枚でも頼んでみよう。もっとも合成食糧に変わりないだろうが』

「腹を満たしてくれるなら、同じことだ。うちの相方はもう着いているのか？」

『ああ。三十分ほど前に到着した。飯を食ってないというもので、食堂まで案内したよ。あんたもそうするかい？』

「食事というのが、MREでないのなら」

今度のはつきりとわかる笑い声上がる。ずいぶん人懐っこいようだ。アレックスは言った。

『前哨基地といっても、物資は滞りなく届いている。それなりの食事はできると思うぞ』

「それならお願いしよう」

数分ほどして前哨基地へ到着し、オプライエンはそれにさっと目を細めた。デルタ中隊とはまた別の機種、中距離戦闘を想定したアサルトライフル砲を持つ量産型が十二機。それにMTと略されるマッスルトレーサーが三十機は駐留し、地对地ミサイルを積んだ車輜も確認できた。前哨基地にしては、あまりに充実しすぎている。絶えなく点いている灯かりにナイトビジョンは必要ないと感じ、オプライエンはカメラを通常モードに切り換えた。

「ずいぶん賑やかだな」

それとなく言うと、アレックスは勘付いたらしい。別段、隠す様子も無く説明した。

『皆、この作戦のために集められたんだ。この基地の所属部隊は、

我々だけだよ。どうにもアームズフォートが出張っているらしくてね」

「そう聞いている」

答えると、アレックスは溜息をついた。

『お偉方には参るよ。おとなしくネクストを投入すればいい』

「だが、そうなるとおれもあんたも飯が食べなくなるぞ」

『まあ、そうなんだが。 ああ、あそこだ。機体はあそこに停め

てくれ』

とって装備した短縮型ライフル砲の銃口を向け、基地の一角を示す。ちょうど裏手にあたる位置で、すでに一機の姿があった。

ファルクラムと同じオリジナルモデル。それ故か外見はまったくの別物で、本当に同種の兵器なのか疑いたくなるほどだ。逆関節の脚部と、右腕部にファルクラム同様の対ACライフル砲を装備しているが、左腕部の武装は至近距離専用の刺突型ブレード。右背面にファルクラムより軽量の追加弾薬パックに、左は軽量のチェーイングンを搭載していた。チェーイングンの弾薬は通常のAP弾だろう。両肩にこれもファルクラムと同様のスモークディスプレイャーが搭載されている。明らかな軽量機は、全体が灰色を基調としたデジタル処理のACU迷彩だった。ちょうど、オプライエンのパイロットスーツと同じように。

それがレイヴン、ボーイングの乗る機体で、パーソナルネームをベヨネットという。銃剣の名を冠するところは、おそらく刺突型ブレードから来るものだ。いまはボーイング本人の姿が無く、基地所属の整備班と思しき男たちが、甲斐甲斐しく補給作業を行なっている。確認できる熱反応は、いつでも出撃できるためのアイドリング状態だからだろう。

オプライエンはそれでも最低出力だったブースターを停止し、警告を促して整備班をどけながら移動する。ベヨネットの真横に停止し、同じくアイドリング状態にしてから彼はコックピットの装甲を開けた。ヘルメットは脱いで座席に置いておき、ファルクラムの機

体上部へ上がると、先端に取っ手の付いたワイヤー式ラダーを掴んで降りる。ふと目を向けると、デルタ2 1のコックピットからもアレックスが降りていた。他の三機は違い、彼が待機を命じたのだからとオブライエンは思った。

「初めまして、レイヴン」

アレックスは言つて、ヘルメットを脱いだ。そこにあつたのはやはり二十代と思しき青年の顔で、兵士の格好が不似合いな男だった。クルーカットの黒髪に、ひよろりとした小柄な体躯。目は人柄を表わすかのように、澄み切ったブルーだった。

「アレックス少尉だ。改めて、よろしく。中隊長と司令に代わつて、協力に礼を言うよ」

「こちらこそ。おかげで餓死の心配がしばらくは無くなった。オブライエンだ」

差し出された手を握り返し、オブライエンは言つ。と、アレックスは小首を傾げた。

「妙だな。どこかで聞いた覚えがある」

予想していたそれに、苦笑した。

「アスピナ機関のリンクスだろう。単機でアクアビット本社を壊滅させたという。彼の名がジョシユア・オブライエンだった。言つておくが、私とは何の関係も無いぞ」

そう言つと、アレックスは納得した表情を見せ頷いた。それから食堂へ行くかと尋ねられ、オブライエンは何の不思議もなく頷く。

アレックスは整備班にファルクラムの補給作業を命じ、先導して歩き出した。道中に彼が訊く。

「君たちが来る前に、あらから経歴を調べさせてもらった。念のためね。正直言つて、カレード所属のリンクスと間違えたのではないかと思つたよ」

カレード。リンクスを統括する企業連合の機関だ。現存するリンクスは、一部のイレギュラーを除いてそこに登録されている。

アレックスが続けた。

「単独で量産型A C二個中隊を撃破。さらにMT一個小隊の救援に向かい、敵勢力の七割を壊滅。目標の小隊には被害ゼロだった？」
「それは敵の性能差が同等だったからだ。ネクストのように馬鹿げた敵でなければ、戦術と技術次第でどうにでもできる」

「言うだけなら簡単さ。あんたの驚くべきところは、それを実践していることだよ。ボーイングとも、たびたび共闘しているらしいな。量産型とは出力が桁外れのオリジナルモデルとはいえ、ノーマルであれだけの戦績を残しているのはあんた達ぐらいだろう。 どうして企業専属にならないのか、不思議だよ」

問いかけに、オブライエンは苦笑して答えた。

「おれもボーイングの奴も、単なるひねくれ者ってだけさ。企業にこき使われるのが嫌で、自分一人が飯を食えればそれでいい」
ほう、とアレックスは興味深げな声を漏らす。

「私にはわからない。レイヴンの考えというやつか？」

「いや。時代遅れの我侬だ」
ふとオブライエンは微笑んだ。屈強な傭兵の表情に現れたそれは、妙に寂しげな雰囲気醸し出していた。

「やはり、わからないな」

アレックスが頭を振り、それから前方を指差して言う。

「あれが食堂だ。好きなだけ食べてくれ。ただしアルコールは無いぞ。 あったとしても、作戦前に酒を飲む馬鹿はいないと思うが」

「同感だね」

それからデルタ2小隊長は気楽に敬礼し、踵を返す。

「あまり時間をかけていると、中隊長に殺される。短い時間だが、くつろいでくれ」

それだけ言って彼は去って行った。オブライエンはしばし後ろ姿を見送り、ややして食堂のドアを開けた。人はまばらだが、わずかながらに活気がある。中は空調が効いていて、適度な室温が保たれていた。食事はバイキング方式になっていて、アレックスが言ったとおり充実したメニューが並んでいた。

オブライエンはトレイを取って、ステーキとサラダ、それに丸パンを乗せた。一見、本物のそれにしか見えない食事は、だが全て合成食糧だ。軍だけでなく、民間にしても同じだ。クローン製造の食糧もあるが、この世の中で本物の食糧とは高価なのだから。企業のトップクラスか、カロード所属リンクスの最上位でなければ口に入らないだろう。もっともオブライエン自身、生まれてから合成食糧以外は食した経験に乏しいため、まったく気にしていないのだが。席を捜していると、不意にACU迷彩のパイロットスーツが目につまった。もう食べ終わったらしく、煙草を吸って食後の一服を決め込んでいる。その向かいに腰掛けると、ボーイングは初めてオブライエンの存在に気付いたらしかった。

「なんだ、早かったな。タダ飯食えると聞いて飛んできたか？」

「ああ。VOB（ネクスト用の使い捨て大型ブースター）が欲しかったくらいだ」

もう一人のレイヴンは笑う。ボーイングは比較的だが小柄な男で、クルーカットまではいかないものの短く刈り上げた髪は白く、目はグリーンで穏やかな顔つきをしている。目尻に見える皺は年齢を知らせているはずなのに、壮年のレイヴンは人柄からなのかまだ若々しく見えた。

「元氣そうで安心したよ、オブライエン。まだくたばっていないよ
うだ」

「こっちの台詞だよ、じいさん。もう七十だろう。いい加減、弾じやないお迎えが来てもおかしくない」

言ってステーキを口に運ぶ。ボーイングは楽しげに笑った。

「まだ四十半ばの若者が馬鹿を言うな。この老いばれもレイヴンだぞ。傭兵は死ぬまで傭兵だ」

「確かに」

お互いに微笑みを交わし合う。老兵ボーイングは、オブライエンにとって師でもあった。レイヴンとしてアーマードコアを扱うノウハウを教えられ、育てられた恩がある。時折、実戦以外に入るリン

クスの訓練目的が主の模擬戦闘なども、ボーイングのコネがあつてこそその依頼だつた。だがそれはあくまで師であつて、親ではない。そう考えた頃もあつたが、なにぶん若者と違わぬ口の利き方をする男だ。人柄に相まつて、年齢を誤認させる。強いて言うなら友人に近い。

「ブリーフィングは十時半だそうだ。それまでは自由にしていると
の事だ。若い連中とカードでもするかね」

「またガキから巻き上げるのか。まったく、性根の捻じ曲がつたじいさんだな」

言葉とは反対に、口調からは親しみが伝わつた。戦場で敵対すれば殺し合う傭兵だというのに。それほど信頼は揺らぎ無い。久しぶりに会う親友との会話に、オ布莱イエンの口元からは人間的な笑みが消えなかつた。

午後十一時を過ぎた頃、オ布莱イエンはファルクラムのコックピットにいた。場所は前哨基地でなく、リッチランド農業プラント。隣にはボーイングの搭乗するベヨネットの姿もあり、またステルス機能を使ってリーダーから消えたデルタ中隊が、周囲の丘に散らばつて監視している。

前哨基地の司令官は、ファルクラムとベヨネットに頼りきつていた。ブリーフィングで行なわれた説明は、あまりにも頼りない。デルタ中隊とリッチランドに先行し、敵部隊を迎え撃てとのことだ。他の部隊はと言えば、オ布莱イエン達が撤退した後には挟撃を行なつて残敵を掃討するらしい。つまりアレックスの言う敵と交戦するための増援部隊は、実のところ基地守備に回される。リッチランド自体の部隊は二人のレイヴンとデルタ中隊だけだつた。極めつけは予想される敵戦力である。量産型アーマードコアとMTからなる混成部隊で、規模は二個中隊ほどだという。もはや確実に加わっているアームズフォートの話は伏せたままだ。

「あの基地司令、一度でいいから殴りたいよ」

『くさるな、オブライエ恩。これがレイヴンというものだ。所詮は傭兵、使い捨てでしかない』

諭すような口調でボーイング。不満そうにオブライエ恩が息をつくと、デルタ中隊長のハーケン大尉から通信が入った。

『ベヨネット、ファルクラム、こちらデルタシックス。たったいま敵部隊を確認した。そちらの正面十二時方向からだ。およそ六分で最初の部隊が交戦地域に来る』

『了解、デルタシックス。規模は？』

ボーイングが応じた。ほんの少し間があり、ハーケン大尉は述べる。

『機動部隊はブリーフィング通りだ。だが、やはりというかデカイ反応がある。アームズフォート、ランドクラブを確認した』

「やれやれだ」

オブライエ恩が呟くと、ボーイングはふむ、と考え込んでから答える。

『ともかく交戦する。デルタシックス、援護を頼む』

『了解。だがアームズフォートはどうする？』

『それはその時に策を講じよう。ファルクラム、いけるな？』

「了解」

短い呼吸を吐いて、オブライエ恩は機体の戦闘システムを起動した。それまで比較的にして静かだったタービンが、巡航モードを凌ぐ喧しい騒音を出し始める。同時にファルクラムA Iが言う。

『メインシステム、戦闘モードを起動します。セーフティ、オフ。マスターアーム、オン。各兵装チェック、オールグリーン。戦闘モード、オンライン・プロセスを完了』

ヘルメットバイザーのHUDが切り換わる。搭載したFCS（火器管制システム）に入力された、戦闘モードへ移行。選択兵装、レーザー範囲、速度、高度などに加えて短距離索敵リーダーを除くほとんどの情報が除外された。右手でサイクリック・スティック、左

手でコレクティブ・スティックを握る。開いた常時双方向回線に向け、彼は言った。

「ファルクラム、エンゲージ・スタンバイ」

「ベヨネット、エンゲージ・スタンバイ」

二機の、だが全く異なるアーマードコアは静かにその時を待った。ほどなくしてリーダーに反応。IFF（敵味方識別装置）はそれを敵機^{ボキ}と表示した。

「ベヨネット、エンゲージ」

先にボーイングが動いた。逆関節ならではの素早い跳躍で飛び上がると同時に、ブースターを吹かし接敵する。

「ファルクラム、エンゲージ」

言うや否や、オプライエンは続く。出力を強化されたブースターは轟然と吼え、ものの数秒の内に一機の量産型をライフル砲の射程に収めた。自動照準^{オートシーカー}が作動し、ロックオン。即座に左手が動く。親指がLRF/Dトリガーを押し込み、照準されたレーザーは射撃補正の測定を終える。続けて人差し指がトリガー・スイッチを押し、砲口からAPFSDS弾が発射される。それはまっすぐ敵機のコックピットを貫き、巨大な人型兵器を一撃で屠った。ロックオンから撃破まで、要したのは約二秒。

続けて左から接近する敵機を捕捉。同じ手順で右腕部のマシンガンが火を吹いた。三点バーストで放たれた徹甲弾は、胸部に二発命中。残る一発はジエネレーターを直撃した。タービンが異様な駆動音を上げ、暴走。さしずめ悲鳴だろうか。急上昇したエネルギー供給に排熱が追いつかず、だがオーバーヒートの前にエンジンが限界点を突破。コア上部が爆発し、消し飛んだ。搭乗者は跡形も無いだろう。

と、間髪入れずに警報。背後から敵が急接近する。マシンガンならばすでに撃たれている。刺突型か、レーザー型か。その判別はできないものの、とにかくブレードが敵の武装だとははっきりわかる。回避行動のため急旋回した刹那、だが敵機は背中を殴られたように

倒れた。機外の音が聞こえたのなら、オブライエンは歯の浮くような金属音を聞いただろう。デルタ中隊の一機が発砲し、その大口徑スナイパーキャノンで見事にコックピットを撃ち抜いたのだ。

安堵すると共に、オブライエンは次の行動に移った。前方へ向き直り、敵主力部隊を即座に確認。MTは軽量型がほとんどだ。それがわかるとサイクリック・ステイックのウエポン・アクション・スイッチを押し、兵装を切り換える。マシンガンを持つ右腕部が待機状態となり、背部で折り畳まれていた滑腔砲が展開される。一瞬だけステイックから手を離し、コンソールを操作して音声入力ボイス・コントロールをオンに。

「ランチャー、M A A W Sを装填。信管、百フィート。次弾、H E A T M P」

僅かにファルクラムが揺れる。砲身を選択された砲弾が装填されたことをHUDで確認し、ファルクラムは片膝を付いた発射態勢を取る。人間でいうところのニーリング・ポジション、つまり膝撃ちの状態に近い。着弾地点にレーザー照準を行なうと、直ちに演算処理で弾道計算が実行される。同時に砲身の角度が修正され、それまでよりやや上方を向いた。発射可能のサインが出た瞬間、オブライエンは発砲。

滑腔砲から破裂音が上がり、夜闇に盛大なマズルフラッシュの花を咲かせる。放たれた砲弾は放物線を描いて接近する敵の真上に落ちてゆき、オブライエンが指示した高度で爆発した。瞬間、その内部に満載した小型徹甲弾がばら撒かれ、MT部隊を文字通りに引き裂く。オブライエンが撃ったM A A W Sとは、つまるところの榴散弾だ。空中で炸裂し、目標に弾の雨を降らせる。だがこれが通用するのは対人ないし軽装甲目標、ソフトスキンと呼ばれる敵だけで、さらに内部に抱えた無数の徹甲弾も相まって高コストな砲弾だ。場面が限られ、さらに高価の二つの要素のせい、需要はほとんどない。事実、オブライエンにしても同種の砲弾は残り三発だけだ。

『殺す気か、オブライエン』

排莢と次弾装填の最中、ボーイングが言った。どうやら今のMT部隊へ向かっていたらしかった。音声入力で喋っているのに気付き、慌てて退避したのだろう。言葉の割に落ち着いているのは、これまでもつと過酷な状況を経験したからこそ。

「すまない。だが」

「何だ？」

「またお迎えを追い返したな」

すると一転、ボーイングは豪快に笑った。何度となく実感したことだが、やはり七十近い年齢には思えない。

「それでいい、相棒。その意気だ。デルタシックス、聞いているな？」

すぐさまハーケン大尉が応じた。

「了解、こちらデルタシックス。どうした？」

「ここは我々だけで充分だ。第二波を警戒し、攻撃してくれ」

「了解した、ベヨネット。そちらを頼んだ」

通信が終わるのを待って、オプライエンが言う。

「何も援護を減らすことはないだろう」

ブーストで後退し、滑腔砲を直接照準。目標は重装甲の量産型A C。タンク型の脚部で、背面に巨大な砲身が折り畳まれている。オプライエンはそれが展開される前にトリガーを押し込んでいて、多目的対機甲榴弾HEAT MPが発射される。それはタンク型のコアを中心から入り、機体内部で爆発した。

ボーイングが言う。

「問題があるかね？」

ベヨネットが緊急用オーバード・ブーストを起動して瞬間的に敵機へと肉迫、パイルバンカーにも見える刺突型ブレードを見舞い沈黙させた。続けて急旋回し、今度はライフル砲を照準。二機の量産機ノーマルに連続で五発が放たれ、二発は中量型の両脚、その関節部、もう三発はファルクラムの砲撃より生き延びた軽量型のコアを正確に撃ち抜いた。一旦飛び上がって、ベヨネットは上方から転倒

する中量型に接近し、ブースターも吹かした動力降下をもつてしてブレードを突き立てる。

老兵ボーイングの鮮やかとも言える戦闘を何ヶ月かぶりに見たオブライエンは、一瞬だけ言葉を失い、そして呆れた。溜息混じりに彼は言う。

「あんだ一人でも、充分に事足りる気がするよ」

「馬鹿を言うなと何度も言わせるな。おれはこれでも老人だぞ。若者が老いばれに無理をさせるな」

「おれも言うほど若くはないがね」

滑腔砲を折り畳み、マシンガンに切り換えながら言う。

「何を言っている。おれより五歳年下なら、誰であるうと若者だ」

ベヨネットを狙って数発が放たれるが、逆関節のオリジナルモデルはそれを紙一重で回避。敵機が再度、照準を行なった瞬間、ファルクラムのマシンガンより放たれた徹甲弾を浴びた。

「その理論、全世界の若者に言つてやりたいよ」

「学会にも発表したいところだ」

二機のオリジナルモデルは前後に交差してすれ違い、ファルクラムが前衛に立つ。残敵はMTが二、量産型が六。計八機の敵をライフルとマシンガンで牽制し、ブーストを交えた跳躍で後方へと飛び下がる。するとそれまでファルクラムがいた空間の真後ろに、チェインガンを展開したベヨネットの機影があった。装弾数と速射性にものをいわせた機関砲は、けたたましく絶叫して徹甲弾をばら撒く。排莢口よりおびただしい量の莢が吐き出された。約二秒の掃射で、チェインガンは弾薬パックにより追加された分の弾薬も含めた装弾数、それを四割にまで減らしている。破裂音の連続が止んだとき、当該エリアに敵機は皆無で、第一波と予想される部隊は全滅していた。

「エリア、クリア。デルタシックス」

ハーケン大尉を呼ぶ。

「了解。こちらデルタシックス。さすがの手並みだ。レイヴンか、

敵でなくて良かったよ』

『傭兵冥利に尽きる』

小声でボーイング。無線越したとほとんど聞き取れないが、オブライエンの耳には届いたらしい。証拠に口元が緩む。

「そちらはどうだ、デルタシックス」

『敵第二派をリッチランドの水際で撃退。最後の一機を仕留めた所だ。しかし、そろそろ限界だろう』

ハーケン大尉は口調を僅かに曇らせる。ボーイングが言葉を引き継いだ。

『ランドクラブか』

『そうだ、ベヨネット。こちらへ進行してきている。数分で、そちらのリーダーにも映るだろう。付近にMTが追従しているが、うかつに撃てば砲撃される。ここまでだ。撤退し、司令を説得して部隊を投入しよう』

半ば諦めたような口調。しかしどこか満足しているようでもあった。当然だろう。これだけの戦力で、被害も無しに敵を全滅させたのだから。ここまでやれば、充分過ぎる働きといえる。もっとも、基地司令官が納得するかどうかは別の話として。

『デルタシックス』

ふと思いついたように、ボーイングが言う。

『撤退の必要は無い。君達は後退して援護態勢を取ってくれ』

『何だと？』

疑心暗鬼という口調でハーケン。

『ベヨネット、何を言っている』

『作戦だ。デルタはこちらの指示があるまで待機してもらいたい』

『ベヨネット、ふざけるな。これは』

『うまくいけば、ランドクラブが手に入るぞ』

ハーケンを遮った言葉は、彼を黙らせるのに申し分ない威力だった。ハーケンどころか、オブライエンまでも沈黙する。

「何を思いついた？」

ようやくオブライエンが言うと、老兵は楽しげな口調で切り出した。

巨大兵器アームズフォート。最大級のスピリット・オブ・マザーウィルは、全長が千メートルを超える化物以上の化物とされる。マザーウィルに関していえば、平均的なアームズフォートが備えるコンセプトである移動要塞の域を超越していた。それには遠く及ばないものの、ランドクラブ級アームズフォートは全高百メートル以上で、ノーマルを始めネクストから見ても圧倒的な威圧感を有する。そして今まさに、ランドクラブはリッチランド農業プラントへ足を踏み入れようとしていた。

「本当にうまくいくのか？」

高度に対傍受処理をどこされた秘匿回線で、オブライエンは咳くように言った。

『さて、どうだろうな』

答える老兵ボーイングは、やはり楽しげな調子を崩さずどこか胡散臭さを醸し出している。

「勘弁してくれよ、じいさん」

『なに。失敗したらその時は、仲良くお迎えに来てもらえばいいさ』
二人のレイヴンが乗るノーマル・オリジナルモデルは、それぞれがリッチランドの両脇に停止していた。動力を非常時の最低出力で起動するため、カメラアイはおろかブーストも使用できない。無線とレーダー、それにもう一つの細工以外は、指先一つ動かせない状態だった。だが、リッチランドを始めとして追従するMTにも、二機のアーマードコアは発見できないだろう。リッチランド農業プラントは現在、デルタ中隊の設置した複数のECM（電子妨害）発生装置に囲まれ、重度のジャミングが飛び交っている。敵にしてみれば、レーダーはもちろんのこと各種センサーにも異常をきたしてい

るはず。専門のECCM（対電子妨害）装置でもなければ、通信すら不可能だろう。

レーダーを見つめながら、オブライエンは言う。ランドクラブの巨大な影が邪魔して、正確の位置も把握しづらい。

「まだか？ もうとつくに目標位置だろう」

「焦るな、オブライエン。落ち着いて、慎重に動かなければならない。これを成功させれば、ボーナスは確実だ」

「了解」

と応じる。その時だった。短い電子音と共に、一機の敵MTの反応が消失する。

「やれ！」

「わかっている」

互いに叫び、オブライエンはトリガー・スイッチと異なるもう一つの発射スイッチを押していた。ウェポン・リリース・ボタンと呼ばれるそれは、本来ならばミサイル兵器の発射に使用する。だがファルクラムとベヨネットはミサイルを搭載していない。これは代わりに肩部のスモークディスプレイチャージャーに繋がっている。

突如、二機の肩に搭載された発煙弾発射器は、それぞれが外側に開いて中身を晒す。連装ロケット砲に似た砲身が姿を見せ、間髪入れずに軽快な発射音が響いた。全弾を撃ち尽くし、発射器は機体から切り離されてリッチランドの大地に落下。

続けて起動スイッチを押す。AIが告げた。

「メインシステム、緊急始動。オンライン、完了」

演算処理装置に急激な負荷をかける緊急始動は、これで二度目だろうか。そんなことを考えつつ、オブライエンは前方を見据えた。復活したカメラアイが、煙に覆われつつある巨大な胴体を捕捉する。シーカーは動作不良を起こしていた。緊急始動のせいではない。目標が大きすぎて、レーザーロックができないのだ。

「急げよ、オブライエン」

ボーイングが叫ぶ。その時すでに、ファルクラムはブースターに

点火して轟然と突き進んでいた。ランドクラブに急接近しつつ、カメライアイをサーモヴィジョンに変更。前方に同じく急速接近する機影を目視で捕らえた。見覚えのある影は、ベヨネット。

二機は衝突するかわかと思われた瞬間、巧みなスピンドで速度を落とす急停止。位置はランドクラブの胴体、その真下だった。

「ボーイング！」

オブライエンが声を張り上げると、応えるかのようにベヨネットが動いた。刺突型ブレードを構え、それをランドクラブに突き立てる。絶大な威力を誇るブレードは、ぶ厚い装甲板を容易く破壊し、穿った。完成した風穴は、ちょうどノーマル一機が通れるかどうかの大きさ。

「続け！」

ベヨネットが風穴より内部へ突入し、ファルクラムが続く。オブライエンは滑腔砲を展開させて、ボイス・コントロールを起動。その間、先行する老兵はブレードを用いてランドクラブの内部に道を作った。

「ランチャー、HEATを装填。時限信管、二秒」

砲身に対装甲用のHEAT弾が送り込まれる。時限信管、つまり発射から二秒後に爆発するという設定だ。不意にベヨネットがまた作った穴の前で立ち止まり、脇に退く。目標に辿り着いたらしい。ファルクラムを前進させると、そこはランドクラブの機関部だった。オブライエンは目視照準にて滑腔砲の射線を定める。目標はランドクラブの動力炉。

「ランドクラブ乗員、およびGA全部隊に告げる」

ボーイングの声が聞こえる。オブライエンはそれをヘッドセットで聞いたのだが、老兵は全周波数回線で喋っていた。同時にECM装置が停止する手はずになっているため、外部のMT部隊にも聞こえていることだろう。もし聞こえていなくとも、ランドクラブの指揮官とは話せるはずだ。なにしろこれだけの近距離である。

「こちらはレイヴン、ボーイングだ。故あってアルゼブラに雇われ

ている。ランドクラブ指揮官、聞こえているか』

返答は数秒の後だった。

『こちらG A社、第21強襲機甲大隊、指揮官のマーヴ中佐だ』

『マーヴ中佐、君がこのランドクラブの指揮官かね？』

『そうだ、レイヴン』

マーヴと名乗ったその中佐は、現状を把握しているようだった。

深い溜息を伴って答える。もっとも、その落ち着き具合から中々の修羅場を経験していると思えるが。

『マーヴ中佐、こちらはいまランドクラブ内部に侵入している。もう一機、別のレイヴンも一緒だ』

『そうらしい。スキヤナーに反応がある。機関部のようだ』

『あなたは優れた指揮官のようだ、マーヴ中佐。どこかの前哨基地司令官とは大違いだ。話が早くて、こちらとしても助かる。もう一機のレイヴン、パーソナルネームをファルクラムというが、その機体は滑腔砲を装備しているね。いま時限信管で二秒に設定したH E A Tが装填され、砲口を動力炉に向けている。この意味が理解できるだろうか？』

マーヴ中佐はもう一度だけ溜息をついた。まるで金を賭けたカードに大負けした、そんな溜息だ。

『了解した。そちらの要求を言ってくれ』

『全部隊の無条件降伏。残っているM T、ノーマル、全機の搭乗員を地上に降りさせ投降してもらいたい。もちろん、マーヴ中佐、あなた方も』

『捕虜の扱いについては？』

『アルゼブラ社のハーケンという大尉を通じて、この付近にある第61前哨基地の司令官を説得してある。三食昼寝付きとはいえないが、少なくとも拷問や収容所送り、それに銃殺は絶対に無い。レイヴンの誇りに誓って約束しよう』

中佐は少しばかり考えているようだった。だがほどなくし、返答する。

『了解だ、レイヴン。君たちを信じよう』

それを聞いた瞬間、オブライエンはファルクラムの滑腔砲の照準を外し、背部に折り畳んだ。マニュアル操作で砲弾の制限装置を解除し、セイフティをかける。すると途端に緊張の糸が切れ、彼は大きく息を吐いた。同時に、ボーイングに対して新たな念を抱く。畏敬、いや畏怖だ。この男は本当に恐ろしい。実質、ノーマル二機だけでアームズフォートを制圧してみせたのだ。

老兵が思いついた作戦というのは、奇襲によって行なう人質作戦の応用だった。ジャミングで妨害した中、ランドクラブ進行方向の左右にレイヴンを待機させる。そしてデルタ中隊機による狙撃でMTの反応が消失したのを合図に、センサー妨害を行なう粒子を含んだ発煙弾を発射。動きが止まったところでランドクラブの下部装甲をブレードで吹き飛ばし、人質、つまり動力炉を制圧して交渉する。むろんマーヴ中佐の判断力と理解力も成功の大きな要因だが、やはりこの並外れた戦術を提案したボーイングが異常だった。彼が有する才能は、非凡という単語で片付けられないだろう。

だがそんなオブライエンの思いなど察することもなく、老兵は穏やかな口調で告げていた。

『協力に感謝する、マーヴ中佐』

東の空に明るみが生じ始めた。昇る朝日をだがオブライエンは何の感慨も無く見つめる。すると背後から一人の男が歩み寄った。老兵ボーイング。彼は変わらぬ穏やかな口調で言う。

「補給作業が終わったようだ。行くか？」

「ああ。煙草をくれ。忘れてきた」

ボーイングはパックごと投げた。一本を抜き取り、自分のジツポ―で火を点ける。煙草に関係なく、これは必需品だった。いざ機体から脱出することになれば、オートマティック拳銃だけでは心もとない。サバイバルで火は重要だ。

煙を吐き出すと、それは朝日をぼかしてすぐ消えた。まるでレイヴンだ。自分で意思せずにオブライエンは思う。一瞬だけ主役の場に戻っても、すぐに失せてしまう。そこで思った。それはリンクスも同じことだろう。傭兵だけでない。この世界ならば誰に対しても言える。アーマードコアと変わらないのだ。強者は、次の世代から来る強者に淘汰されてゆく。

「じいさん」

「なんだ」

「これから先、この世界はどうなると思う？」

普段の老兵ならば、まず間違いないと笑っていただろう。そしてこう続けるはずだ。どう変わるうと、その時はお迎えが来ている。しかし今この時に限ってだけは、彼は笑わなかった。口調も表情も変えず、穏やかなままで答える。

「いままでと同じさ。その内に今回の作戦が小競り合いに思えるほどデカイ戦闘が起きて、支配者が変わる。もしかすると、変わらないかもしいないがね」

オブライエンは黙ってそれを聞き、また煙を吐き出した。しばしの間があり、それからようやく言った。

「そうか」

まだ充分に残っている煙草を放り捨て、続けた。

「同じだな」

「同じだよ。おれ達もそうだ。いつまで経ってもレイヴンだ。それ以上でも以下でもない」

ふとオブライエンは笑う。

「いい人生だ」

「ああ。いい人生だとも」

それを最後に、二人のレイヴンは踵を返した。オブライエンはフアルクラムへ、ボーイングはベヨネットへと乗り込み、お互い全く別の方位に向けブーストを吹かす。

後に、オブライエンは老兵が本当に予知能力でもあったのではな

いかと疑う。彼が講じた策で鹵獲したランドクラブは、数日後にネクストによって破壊された。ハーケン大尉やアレックス少尉を含めるデルタ中隊はそのネクストと交戦し、そして戦死する。マーヴ中佐はG Aの戦略データをもとにアルゼブラへ鞍替えし、部下の安全を確保した後に傭兵となった。しばしの間が空き、中佐は企業連合に異議を唱える襲撃者、ORCA旅団のメンバーとして現れた。彼は再びアームズフォート部隊を率いて戦い、その中で散ることとなる。淘汰されてゆく世界の中で、しかしレイヴンはそれぞれに戦った。巨大な戦争の中で、彼らは忘れられることも、かといって頼られることもなく生き延びた。それはまさにボーイングの言う、淘汰され変わらない世界だ。

人型兵器アーマードコアと傭兵レイヴン。この二つの存在は、リッチランドでの戦闘を最期にして、二度と表舞台に上がることはなかった。

(後書き)

前からやりたかったAC物をようやく書きました。兵器的な設定については完全に筆者の創作です。コックピット内のステイツク、ディスプレイ系の配置はアパッチ攻撃ヘリをベースにしています。作中という滑腔砲はゲーム内のグレネードランチャーです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7543n/>

アーマードコア アウトサイダー

2010年10月8日13時49分発行